

今年

は

世界化学年

世界化学年日本委員会
副委員長

岩澤 康裕

◆日本が共同提案国

2008年末に開催された国連総会において、2011年を「世界化学年」(IYC2011)とすることが決められた。国際純正・応用化学連合(IUPAC)からの呼びかけに賛同した日本学術会議化学委員会とIUPAC分科会が、国際連合教育科学文化機関(UNESCO)に働きかけて実現。我が国も「世界化学年」の共同提案国となった。2011年はキュリー夫人のノーベル化学賞受賞から100年目、また、IUPAC設立100年に当たる記念すべき年でもある。

「世界化学年」は、統一テーマ「Chemistry—our life, our future」の下、①化学に対する社会の理解増進②若い世代の化学への興味喚起③創造的未來への化学者の熱意ある貢献への支援④女性の化学における活躍の場の支援——を目的に、世界各国が連動して化学に関する啓発・普及活動を行うことになっている。

◆国内でも様々な催し

「世界化学年」事業の推進のため、2010年8月6日、世界化学年日本委員会(委員長 野依良治・理化学研究所理事長)が発足した。企画委

本化学会をはじめ多くの化学系学協会が「世界化学年」を冠した様々な事業を開催する予定である。

例えば、3月に「世界化学年記念シンポジウム」(日本化学会)、7月に「夢・化学」(21/夏休み子供化学実験ショー)(日本化学会、化学工業学会、新化学発展協会、日本化学工業協会)、「見せる・魅せる化学展」(日本化学会、日本科学未来館)、8月に「キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール」(日本化学連合)、9~11月(予定)に「日本の化学者展」(国立科学博物館、日本化学会)などが開催される。

若者が輝ける年に

日本人のノーベル化学賞 受賞の背景に“若者”の力。

◆相次ぐノーベル化学賞受賞

2000~2010年の間に、6人の日本人(白川英樹、野依良治、田中耕一、下村脩、鈴木章、根岸英一)の各先生方がノーベル化学賞を受賞し、我が国の化学の研究水準の高さを示している。これらの研究が行われたおよそ30~40年前、当時の経済成長は社会に活力を生み出し、若者による新しい研究領域を開拓する力が満ちていた。

しかし昨今、若者の理科離れが指摘されている。社会は若者の自由な発想力と研究力及び多様な価値観に根差した

科学・技術の推進に期待している。資源もエネルギーも乏しい我が国にとって、文化的な持続的社會を保証するのは科学・技術以外にないし、科学・技術は政策や経済を超えて社会に貢献する。「世界化学年」事業が行われる2011年、化学の一層の振興と社会への幅広い普及・啓発を図り、我が国の科学・技術が一層振興し、持続可能な社会を支える人材の育成と増進が図られ、我が国の力強い将来が構築され若者が輝く化学年となることを願う。

*いわさわ・やすひろ 1946年生まれ。日本化学会会長、日本学術会議第三部(理学・工学)部長。電気通信大学教授、東京大学名誉教授。